

パラグライダー —思いがけないクリスマスプレゼント—

昭和39年卒 榎 原 俊 司



テイクオフ直後

何時の頃だったろう、空を飛んでみたいと大空に強い憧れを抱きはじめてのは。戦後間もない小学3年生だったはずだが(23年)。近くの駄菓子屋で見つけた模型飛行機セットを、母にせがんで無理やり買ってもらった。ようやく出来上がった機体の翼が乾くのも待ちきれず、密かに、夕暮れの誰もいない校庭に飛ばしに行った。翼が破れ、トボトボと家路につく幼いイガ栗頭の後姿が目につく。

裏山の傾斜から、校庭に向かって飛ばす機体は、何度試みても旋回してすぐに墜落してしまった。もっと良く飛ぶ大きな飛行機が欲しい、茜空をねぐらに急ぐ鳥のように、カァカァ飛んで帰れたら……と。あの日の事が、若き母の顔や貧しかった日々と共に、鮮やかによみがえって来る。思いがけなくも、年の瀬のクリスマスの日に、遠い彼方に過ぎ去った幼い日々を思い起こすキッカケを、

同期の窪田君からプレゼントされた(いや、窪田君からこの原稿を命じられた)。まことに恐縮ですが、皆様には面白くも何ともない私事を、つついとお返しとして告白する次第にて、ご笑読あれ。

パチンコ人生

私の生まれは瀬戸内の尾道市。海から約5kmほど山合いに入った村で、後に、合併で市となった。昭和33年に市内の高校を卒業、京都で2浪、35年に同志社(経済)に入った、いや航空部に入部。部での生活は、まことに残念ながら「玉水でのパチンコ」止り。かろうじて、八尾飛行場での幾度かの中級合宿経験がある程度。諸氏とは比ぶべくも無い影の薄いOBである。切なきかな、この年に至っても、初めて地上から浮いた、汗まみれの、あの真夏の「パチンコ」が忘れられない者である。飛びたくとも、選ばれた者にしか中級・上級機での練習チャンスが与えられない侘しい時代でもあ

った。時の流れとは云え、上級機から練習に入れる現在の恵まれた環境には、うらやましさを禁じ得ない。勉強らしい勉強もせず過ごした4年間であったが、思い出多きクラブ生活は何物にも替え難い。すばらしき諸先輩、後輩の皆様、同期の面々、かけがえの無いものばかりだ。航空部卒と云って何はばからぬ。

「人間50年下天のうちに……パチ、パラの如くなり」。

昨年9月、永の会社勤めから離脱し、今ほっとしているところである。この先遊んで暮らせる程の余裕は無いが、目下、再度の勤めもままならぬと云うところで、暫し惰眠を貪っている。50に手の届く頃より、たまの休みが何か満ち足りず、このままアクセク暮らして、気付けば「ハイさようなら」では情け無いとの思いが、日増しに募り出した。年に一度、諸兄と妻沼応援に行くにつけても、やるせなさは、更に募る思いであった。閑宿

滑空場で、「ヘキサン」と云うクラブが入会 OK と云ってくれたけど、経済面で女房に待ったをかけられ、グライダーへの思いはついに断念。その後56歳の夏、思いがけなくもパラグライダーをはじめめるキッカケを娘から与えられた。「空を飛ぶたいの？お父さんは、パラグライダーには興味が無いの？もしあるなら一緒にやらない？」と三女から声をかけられた。一瞬からかわれたかと耳を疑った。我が家は娘ばかりが4人の貧乏人の子沢山。娘から空を飛ぼうと持ちかけられるとは、思いも掛けなかった。子供と一緒に楽しめるのはこの上ない。早速に夏休みを返上し、スクールに通った次第である。娘とは、一昨年の夏まで一緒に楽しんだ。興味が他に移ったらしい。ちょっぴり残念だが、私の方は、年甲斐もなく、すっかりハマってしまった。

パラを始めて7年になったが、皆様に話すのは何とも気恥ずかしい。目下、安全第一をモットー



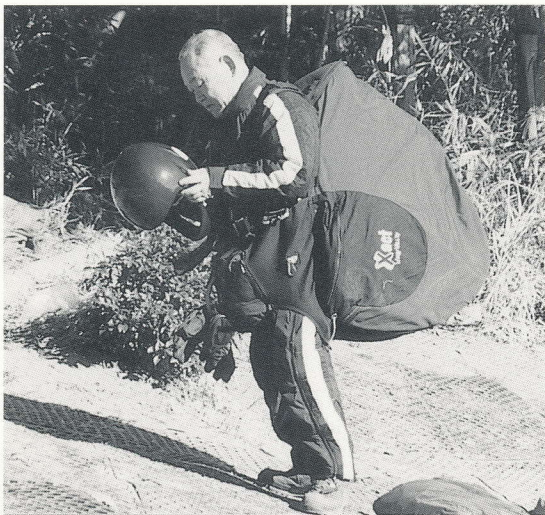
立上げ風景

に、密かに、一人で楽しんでいると云うところ。

風をはらんだ翼を、左右のブレークコードを引いての操作で、離陸、旋回、上昇、着陸する。滑空機として一番シンプルなものだが、空を飛ぶ爽快さは十分に得られる。時折、トンビと同じサーマルを旋回することにも出くわす。その時私は、幼い頃に見上げたカラスになる事が出来る。そして何故か、小野先生のカラス型飛行器を思い出す。

パラグライダーの魅力

土曜祝日には、多くのフライヤーがパラやハングを満喫している。大学生も多い。夫婦で楽しむ人達も結構いる。年齢的には60歳を越える人は少ない様だ。まだそう年月を経っていない新しいスポーツだからであろう。70までは飛んでいたいと思っている。足腰さえしっかりしていれば、歳は関係なく楽しめる。学生は皆同好会で、体育会系の名は聞かれない。パラは趣味として楽しむスポーツで、規律にまで縛られてやりたくないという。そうかも知れない。何と云っても全装備が20kg程



ハーネスを装着した筆者

度のザック一つにまとまり、何時でも何処にでも背負って行け、宅急便で送っても破損もしない。コンパクトさと手軽さが最大の魅力だ。あまりお金をかけずとも、簡単に楽しめる。ワールドワイドなスポーツとして発展しており、国内でも年々、パラ人口は膨らんでいる。

足尾エリアでフライト

パラグライダーを習い、今も専ら飛んでいる場所は、「足尾エリア」である。テイクオフは標高340m、曇の油で名高い筑波山（標高877m）から北に約8kmの足尾山（628m）中腹の東斜面に作られている。のどかな田園風景が見下ろせ、霞ヶ浦の湖面も遠望出来る気持ちのいい所だ。季節に限らず、晴天でゆるやかな東風か南西の風（2～4m/s程度）が吹き込むと、絶好のフライト日和となる、全国でも有数のエリアだ。休日になると、多勢のフライヤーが集まり、なかなかタイミング良く出られず、悔しい思いも再三だが、サーマルブローをねらって飛び出し、そのまま上昇回りしながらトップアウトし、眼下に他機を見る高高度をキープ出来れば、してやったりとついニヤニヤしたくなる。

- ・ブッ飛ばせば頭にくる。
- ・30分を飛べれば、今日はまあまあか。
- ・1時間も滞空出来、1,000mに達すれば、満足満足。
- ・1時間半も粘れば、1週間はルンルン気分、仲間と交すビールの味も又格別だ。折りを見てクロスカントリー証も取っておこう。そんなところで楽しんでいる。

最近のフライト状況は以下のようなだった。

月日(H14)	天候 風向	飛行時間	高度(m)他
1月7日(月)	曇 無風	6分	
〃	〃 〃	7分	
1月14日(火)	晴 南東	1時間54分	最高高度=1200
1月18日(金)	晴 南東	1時間55分	最高高度=1400 ※写真撮影
〃	〃 無風	7分	
1月20日(日)	晴 東	1時間50分	最高高度=1230
2月1日(金)	晴 東(後西)	3時間6分	最高高度=1280
〃	晴 東	16分	アウトランディング(ショート)
2月2日(土)	晴 南東	37分	最高高度= 860

故郷の青い空と海

昨年 8 月帰省の折り、尾道で56分間のフライトを楽しめた。3 年前に市が開設したエリアで、隣り町の三原市との境にある鳴滝山山頂(標高380m)展望台脇から、海に向かって飛び出す。瀬戸内海国立公園の一角で、眼下に市街、遥か「しまなみ海道」や大小の島々、四国連山まで、一望に見渡せる美しい場所である。高度は850mまでしか取れなかったが、夢に見た故郷の空を初めて飛び、無上の喜びにひたる事が出来た。生涯忘れ得ぬ思い出となった。

「夢、幻」

現在、国内にかなりのエリアがあるが、今だ僅かの所しか知らない。海外エリアもいいと聞く。そうだ、今年は女房連れで金沢に行こう。転勤で5 年間を過ごし、冬には子供等とソリ遊びもしたことのある獅子吼高原で飛びたい。白馬に瀬川先輩をたずね、五竜、白馬でも飛んでみようか。だが、連れは、パラウイドウでは嬉しいがまい。何時の日にか、実家の上空までクロスカントリーを

してみたい。ランディングは、決死の覚悟で小学校の校庭だ！

置き去りにしてきた我が青春の細やかな思いを、今ようやくにして、より長くより高くより遠くへと、再び夢見る者である。

機体仕様

所持ライセンス P 証

機体 アドバンス社(スイス)製イプシロン3型
(中級機) サイズ 26

諸元 翼面積 26.2m² (投影22.8m²)

スパン 11.24m² (投影9.25m²)

アスペクトレシオ 4.80 (投影3.70)

セル数 37

適正体重 78~95kg

性能 最少速度 21km/n

最大速度 36km/n (アクセル使用時45km/n)

最少沈下率 1.1m/sec

最良滑空比 7.8



◀ 着陸点から見た離陸場所
(左山頂の白い部分)



◀ 着陸点を上空から見る



ドイツでグライダー 夢の1ヵ月

平成10年卒 吉 岡 名保恵

台風娘、ドイツへ

グライダーに親しむ者として、学生のころから漠然と憧れ続けた国・ドイツへは、一生のうち「いつか」行けたらいいと思っていた。しかし若いときの失敗は糧になり、今しか見えない・吸収できないものもある。だからもし20代でドイツへ行けたら、その後の自分の人生に何か新しいエッセンスが加わるかもしれない。いつの日か「行きたい」は「今行かなきゃ」に変わった。

しかし若い時は時間とお金に余裕がない。そこで私が挑戦したのが、「モスバーガー」で知られる、モスフードサービス社が毎年募集している「地球遊学生」という制度。地球のどこかで1ヵ月、チャレンジしたい夢に対して資金援助をしてくれるもので、私の「ドイツでグライダーの見聞を広めたい」という夢は、同社の社長さんにも思いが通じ、あれよあれよと800倍以上の倍率を突破して採用されてしまった。

また当時の私は新聞記者をしていたが、結婚して転居するため退社することが決まっていた。退社時期を早めれば、ドイツへ行く時間も作れそうだった。これで万事解決。学生のころから窪田さんに「台風娘」と言われてきた私は、とうとうドイツまで飛んでいってしまったのだ。

ワッサークッペ

2001年8月17日、初めて降り立ったドイツ。前半の11日間は、夏休み中だった現在の夫が自費で同行している。移動はレンタカーになるので、車の運転には2人で行動するうちに慣れなければならない。また現地で困ることがないように、と北海道・滝川の教官から、日本へ飛びにきたことがあるドイツ人のディーター氏を紹介してもらっていた。初日は彼の邸宅に迎えられ、体を休める。

初対面なのにとても親切で、食卓にはドイツと日本の国旗まで。聞けば日本やオーストラリアで飛んだとき、日本人はいつも優しく接してくれたからだという。この世界、やっぱり人と人の出会い・つながりがものを言うのだな、と感謝した。

翌日は土曜日。ディーター氏に見送られて、“滑空の聖地”ワッサークッペへ車を走らせた。

「ワッサークッペ」は、フランクフルトの北東約100kmに位置する山の名前である。第一次世界大戦後、敗戦国となったドイツではベルサイユ条約によって飛行機の開発・生産が禁止された。リリエントール、ライト兄弟の飛行に始まり、ようやく「飛べる」という実感を得始めていた時代。必然的にエンジンの無いグライダーが唯一の、飛びたい“渴望”を満たす手段となっていた。

1920年からは、ワッサークッペの丘でグライダーの競技会が始まる。これは夏の国民的行事にも発展し、機体、機材、飛行方法などが次々と開発された。そこで得られた経験や知識は世界各国へ伝えられ、日本へはスターパイロットのウォルフ・ヒルトがミニモアを携えて来日、大きな影響を与えた。これが、ワッサークッペが世界のグライダー活躍発祥の地、といわれる由縁である。

ワッサークッペのあるレーン地方は、自然豊かな美しい地域で、年間を通じて多くの観光客が訪れている。ワッサークッペの標高は約950m。頂上部には、1924年に創設された世界初の滑空学校、滑走路、グライダー博物館、ホテルなどがあり、ふもとの町・ポッペンハウゼンには、我が部の機体も生産したアレキサンダー・シュライハー社の工場がある。

始めてワッサークッペを訪れたときは、観光客の多さに舌を巻いた。老若男女、本当にたくさんの

人が、ランウェイの脇でグライダーが飛び立つ様子を眺めている。小型飛行機やモーターグライダーも、ひっきりなしにお客さんを乗せて飛び立っていた。また近くでは、地元のグライダークラブの人達も機体を展示して、子どもたちをコックピットに乗せている。約30機にのぼる往年の名機が納められているグライダー博物館も、普通の観光客でにぎわっていた。

また別の丘ではパラグライダーの教室が開かれていたり、模型飛行機を飛ばすグループが遊んでいたり、カイト（凧）を飛ばす親子がいたり。ワッサークッペの空は誰にでも優しく、不思議と懐かしさまで感じた。

そしてワシのモニュメント『レーン山上飛行士記念塔』の前に立ったときは、ずっと願い続けた夢が叶った瞬間でもあった。「我等ここに黙せる飛行家は 独力にて勝利を得たり 国民よ 再び空を翔りて 勝利者となれ 汝の力もて」、碑文にはドイツ語でそう書かれていると教えてもらったことがある。グライダー活動発祥の地、ワッサークッペ。今日の発展に至るまでには多くの犠牲もあった。その歴史に想いをはせる。ワッサークッペはまさに、パイロットの心のよりどころだった。

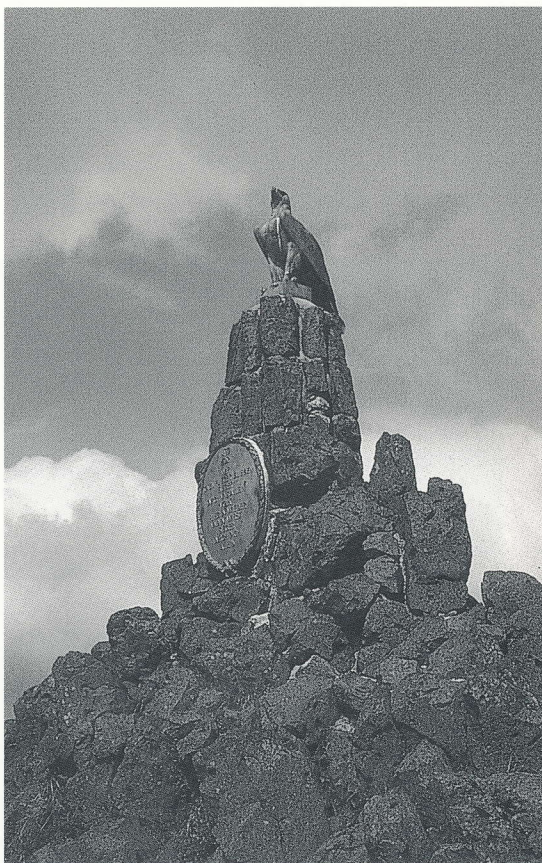
ソロフライトと乾杯

フライトは滑空学校のオペレーションに参加できるよう事前に手配をしていたので、朝8時半からのブリーフィングに参加する。外国人は私たちだけ。何もかもは当然ドイツ語中心で分からないことが多い。でも大抵、面倒見がよくて英語を話せる人が手助けをしてくれる。ログやライセンスは必需品で、書類が揃っていると問題なく飛べるようだ。

初めはモーターグライダーで地形慣熟をして、

アウトランディングの注意点までしっかり叩き込まれた。実は体験飛行ぐらいできたらいいや、と思っていたのだが、その後 ASK21 に 3 回も乗ってソロチェックが通り、一人で飛んでいいことになってしまった。

上空は対流が生まれ始めていて、先に飛び立った古典機が旋回している。曳航機と同じサーマルに連れていかれ離脱。古典機とサーマルリングするなんて、ワッサークッペらしくて感動する。着



ワッサークッペのシンボル
「レーン山上飛行士記念塔」

陸すると「ヨーロッパでの初ソロおめでとう」とみんなから祝福された。いつのまにか私たちは「仲間」になっていた。

撤収の後、格納庫の前に集まってビールを飲んだ。だれかが日本語で乾杯を何と言うのかと聞く。親日家のドイツ人が「カンパイだよ」とすかさず声をあげた。「そうか、カンパーイ！」。

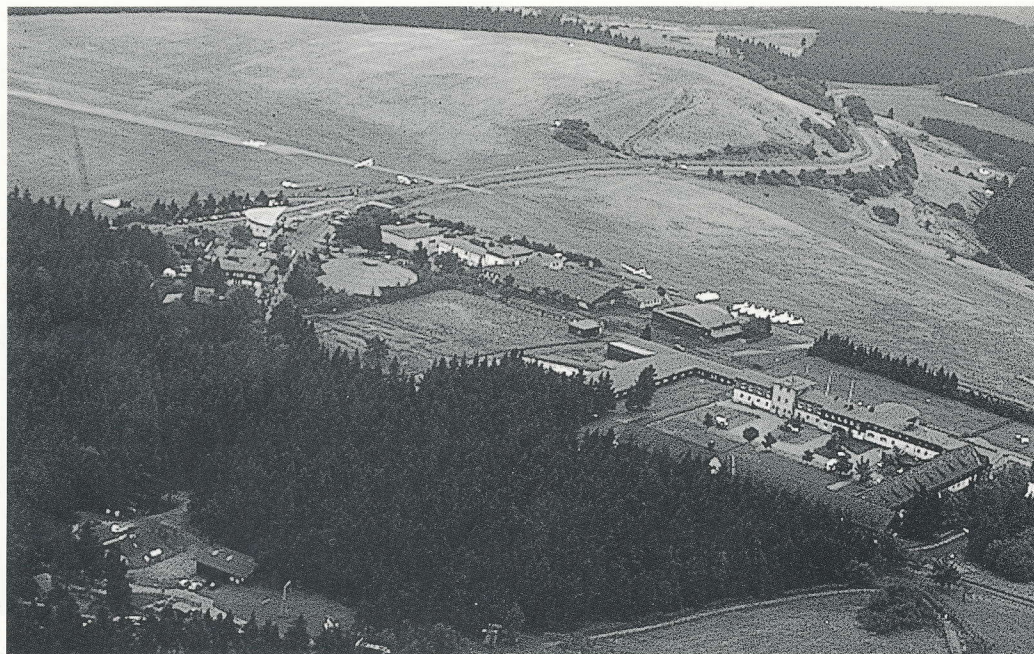
その後、私たちはパイロット仲間に誘われ、ワシのモニュメントまでピクニックへ出かけた。午後8時、ようやく夕暮れ近くなり、パラグライダーがふもとの村へ帰ろうと丘を飛び立っていった。彼らと食事を楽しみ、ホテルに戻るとレストランには別のグループがいた。彼らはラジコン愛好家のおじいちゃんや、パラをやっている人たち。テーブルには「常連客専用」というプレートが置

かれている。いつもワッサークuppeで飛んでいる人の専用席らしい。そこにも混ぜてもらって、また乾杯。グライダーをやっているだけで、こんなにも沢山の出会いがあるなんて！

アルプス山岳滑空学校へ

翌日は雨で、他のパイロットたちとシュライハーの工場へ見学に行った。学校へ戻ると、学校長が滞在期間のみ有効な、ドイツのライセンスに書き換えをしてくれた。そして私たちは、次の目的地である南ドイツのウンターウォッセンへ。ここにも滑空学校があり、アルプスの山岳フライトができると聞いていたのだ。

ウンターウォッセンは有数の保養地で、騒音対策に万全の体制をとっている。たとえば、曳航は電動モーターを使った4連ウインチが中心。機体



ワッサークuppe上空から（左上がランウェイ）

の運搬に使うのは電動カート、AT をするにしてもモーターグライダー。とても静かで、上空を飛ぶ機体の風を切る音だけが聞こえてくることもあった。また、ここにも多くのギャラリーがいて、隣接するカフェテラスでゆっくりグライダーを眺めていられる。

あいにく天候に恵まれず、期待したクロスカントリーはできなかったが、モーターグライダーで遠出して飛んだり、ASK 13で周辺の山を飛んだり。一方のドイツ人は朝 7 時半から機体を出し、日没の夜 8 時ごろまでウインチでひたすら飛び続けている。小雨が降ったって発航は途切れず、傘をさして搭乗準備。日本人なら飛ばないよなあ、と思う天気でも、LS-4 やディスカスがひたすらバツ

飛び。この気迫には閉口してしまった。つべこべ言わず飛べ、ということなのだろうか。

「グライダーが好き」

その後、ミュンヘンでドイツ博物館本館と航空機専門の別館を訪ねた。いずれも本物の機体とともに、英語表記もあるのでとてもいい勉強になった。

そうこうしているうちに同行者が帰国。1 人になって不安な私は、しばらくディーター氏の家ホームステイし、次の行き先を決めることになった。せっかくドイツへ来たのだから、とディーター氏は仕事の合間、ライン川下りやナイトショーなど、さまざまな所へ連れて行ってくれた。彼が仕事をしているときは、1 人で周辺の町ヘドライ



アルプスのフライト (ウンターウォッセン)

ブ。そのうち1人でも行動できる自信がついてきた。ある日、フランクフルトの高層ビルで、ディーター氏が指差して言った。「この先にワッサークッペがあるんだよ」。ワッサークッペ、その名前を聞くともう一度行きたくなった。

そして再び舞い戻ったワッサークッペ。8月も終わりに近づき、滑空学校の人も少なくなっていた。けれど新しくブラジル人の友達もできたし、ホテルには馴染みの顔もそろっていた。何より盆栽を育てているという日本好きのドイツ人が、専属の通訳をかってくれた。おかげでパイロットたちがよく利用するレストランで美味しい食べ物にもありつけ、生活には不自由しなくなった。日本人グループで行動してはできなかったことが、1人になったことで体験できた気がする。ちょっぴり勇気があるが、これが一人旅の醍醐味なのだろう。

しかし天気は急速に「秋」となり、しぐれ空の日が続いた。標高の高いワッサークッペは毎日雲の中。飛べないのは残念だったが、仲間たちが自宅に招待してくれたら、周辺の街へ連れて行ってくれたりで飽きることはなかった。

“通訳”のドイツ人は言った。「今ごろほかの友達海外でバカンス、自分は雨で飛べないのに何をやっているんだろう？って思うよ。本当にただ飛びたければ、ほかのところの方がずっと飛べるはずだ。それなのにワッサークッペに集まってくるパイロットがいる。僕もそんな1人。このランドスケープも人もみんな好き。日本から来てワッサークッペに滞在するなんて、きっと君もクレージーなパイロットだよ」。

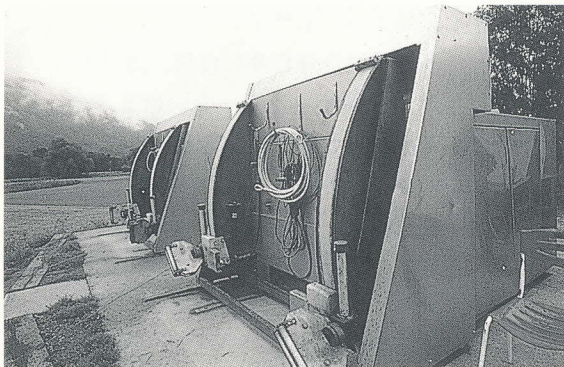
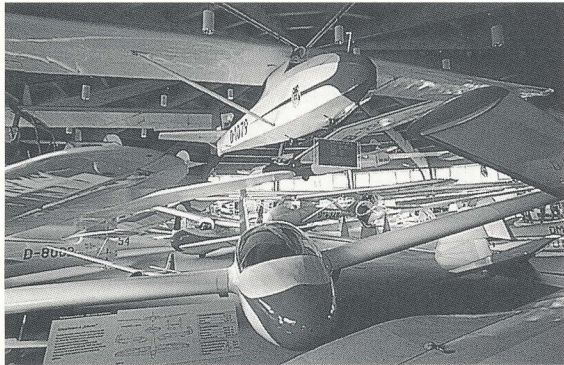
ワッサークッペでは多くのパイロットとふれあい、笑い、グライダーに触れた。いつの間にか立

ち去る気になれずについて、結局2週間以上も丘の上の生活、「ワッサークッペに長く滞在した日本人では歴代10位以内に入るんじゃないか?」、そう茶化されたことも。帰国直前には天気も回復し、モーターグライダーで大好きになった土地を存分に眺めたあと、学校長の操縦でアクロも体験し、ドイツの空を堪能した。

気づけば、気負うものは何一つ無く、「グライダーが大好き」「グライダーをやっている良かった」と思える自分がいた。学校長は言っていた、自分が全世界にいるグライダーパイロットの1人であることを誇りに思う、と。

帰国してからも仲間たちとは交流が続いている。“通訳”の彼は日本語学校へ通い始めて、「あけましておめでとう」としたための年賀状まで送ってくれた。彼もディーター氏もいつか日本へ遊びに来てくれるというので、今度は私が日本のグライダーを紹介したい。

グライダーという趣味を通し、たくさんの経験・出会いに恵まれた旅。打ち込むものがあれば、人の輪・私の世界はぐんと広がる。これからもマイペースでグライダーと付き合っていきたい。



ワッサークuppe
グライダー博物館

電動ウインチ

グライダー
学校の校長
先生と筆者

ピクニック
筆者の前が
ご主人

